

## 第 265 回 墨田区の勝海舟像と加納金助像

筆者：林 久治（記載：2024 年 2 月 17 日）

### （1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は「日本の銅像探偵団」 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」という意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

今年の冬は暖冬で、私は毎週末に、健康増進を兼ねて銅像探索に行っている。しかし、空振りも少なくない。私は 1 月 5 日に三鷹市法専寺の釋稱念像と府中市多磨寺の菅野運徹像を探索し、[261 回の記事/f](#) にその探索記を記載した。1 月 13 日には、東京国立博物館に行き、[1\) のサイト/](#) に収録されていない狩野芳崖像（1933 年、藤田文蔵作）を見に行ったが、展示されていなかった。当日は、本館の ([1\) のサイト/](#) に収録されている) ジェンナー像と町田久成像とを探索し、その探索記を [263 回の記事/f](#) に記載した。

1 月 19 日に、私は [1\) のサイト/](#) に収録されていない坂本龍之輔像を、台東区立駒形中学校で探索した。その際、銅像周辺からは本像の制作者や制作時期が不明であった。そこで、私は 1 月 27 日に台東区中央図書館に行って、これらの情報の調査を依頼した。その結果、資料室の菊池さんが大正時代の新聞復刻版から、本像の除幕式の記事があることを発見された。坂本龍之輔像の紹介記事は少々あるが、本像の制作者や除幕式を報道した記事は皆無で、**今回の発見は「日本の銅像研究史上」極めて重要である。** 本発見の内容を書き加えて、私は坂本像の探索記を [262 回の記事/f](#) に記載した。

私は 1 月 27 日に台東区中央図書館に行ったついでに、日暮里駅で降りて、東口ロータリーにある太田道灌像と紅血像を探索し、その探索記を [前回の記事/f](#) に記載した。2 月 10 日に、私は墨田区に行って、勝海舟像と加納金助像を探索した。これらの像は [1\) のサイト/](#) に収録されているが、情報欄が乏しい。そこで、今回、両像を探索した次第である。本稿はそれらの探索記である。なお、本稿では私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

### （2）妙見山別院

次ページの図 1 上に、勝像と加納像の周辺地図を示す。私は大江戸線の蔵前駅（図 1 上の①）から妙見山別院（本図の②）に行き、そこにある勝像を探索した。次に、大江戸線の両国駅（本図の③）に行き、その近くにある加納像を探索した。



図1. 上：勝海舟像と加納金助像の周辺地図、①：大江戸線の蔵前駅、②：妙見山別院、③：大江戸線の両国駅、下：妙見山別院の山門。

図1下に、妙見山別院山門の写真を示す。本院は、こじんまりとしているが、由緒の深そうな雰囲気であった。本院の「略縁起」が掲示してあったので、その写真を次ページの図2上に示す。それには、以下のように書かれていた。

#### 能勢妙見堂 略縁起

當山は大阪能勢妙見山の全国唯一の別院であり、能勢家の子孫が代々守護に任じております。今より百九十五年前安永三年五月十一日の創建です。

この地は當時下総ノ國葛飾郡本所横川町と称し、能勢筑前守頼直の江戸下屋敷であり、妙見堂を建立して、知行所たる攝津ノ國妙見山より妙見尊像を分祀したものです。江戸末期幕臣勝小吉が愛息麟太郎、後の海舟の開運勝利を水垢離を取って祈願したことは、子母沢寛氏が「父子鷹」に詳しく記して居ります。

震災戦災と二度の火災の為、宝物尽く烏有に帰しましたが、妙見尊像は巨難を免れ、御内陣に奉安されて在ります。境内に鵜大善神の祠あり、その黒札は魔よけのお守りとして江戸時代より能勢の黒札として有名なり。

昭和四十四年己酉五月 能勢家三十六代 能勢日妙 誌す



図 2.

上：妙見山別院の略縁起、

下：能勢電鉄の路線図、本図は、ウィキペディアより借用。



大阪府北部には、能勢電鉄がある。図2下に示すように、本電鉄は阪急電鉄の川西能勢口駅から分岐して、妙見口や日生中央に通じている。私は、銅像探索では阪急宝塚線も良く利用するので、川西能勢口駅で能勢電鉄の電車を見かけたことはあった。しかし、私は能勢電鉄に乗車したことがない。まして、今回の探索まで、この沿線を根拠地とした能勢氏のこと、そこに霊験あらたかな能勢妙見山があることも全く知らなかった。

妙見山別院の紹介記事は、[3\)のサイト/1](#)が詳しい。本サイトには、勝海舟像の写真も掲載されているが、本像の詳しい説明はない。妙見山別院と本山（摂津ノ国妙見山）の歴史、及びこれらの寺院を創建した能勢氏の歴史は、[4\)のサイト/](#)[5\)のサイト/1](#)、及びウィキペディア（能勢妙見山、能勢妙見山別院、能勢氏、能勢頼次）などに詳しく記載されている。それらを要約した説明が、[6\)のサイト/](#)にあったので、この説明を以下に記載する。

①能勢妙見山東京別院は、大阪にある能勢妙見山の別院です。大阪の能勢妙見山には鳥居があり「妙見宮」とも呼ばれますが、実は能勢町にある日蓮宗の「無漏山眞如寺」の眞如寺の飛び地境内です。能勢妙見山のある能勢町というのは大阪府の最北端の町で、妙見山は大阪府と兵庫県の府県境にあります。

②能勢妙見山は、慶長8年（1603）に、能勢頼次により創建されました。能勢家は、清和天皇の曾孫に当たる源（多田）満仲の子頼国が能勢に移住し、以来能勢氏を名のりました。頼国の兄が大江山の鬼退治で有名な源頼光です。つまり、能勢家は清和源氏の一族ということになります。

③戦国時代の武将能勢頼次（1562-1626）は、明智光秀に味方し天王山の戦いで敗北し岡山に逃れていましたが、徳川家康に召し出されて旗本として徳川家に仕えるようになったようです（領地は、能勢氏旧領の摂津国能勢郷）。東京の別院は、江戸時代後期の安永3年（1774）に、旗本能勢筑前守頼直が、下屋敷に妙見堂を建立して能勢妙見山より分祀した妙見菩薩をお祀りしたものです。

④妙見菩薩は、もとは北辰＝北斗星・北極星の信仰に始まるものです。中国では、昔から北辰を信仰していましたが、これに仏教が伝来した影響をうけて「妙見菩薩」と称するようになりました。日本の仏教では天台宗でお妙見菩薩を信仰しているようですが、特に日蓮宗は熱心に妙見菩薩を信仰しています。

なお、[7\)のサイト/3](#)には「能勢筑前守頼直(4000石)」の記載がある。従って、能勢頼直は大名（知行1万石以上）ではなく、「吉良上野介」と同様な旗本（知行1万石未満）であった。

### （3）妙見山別院の勝海舟像

妙見山別院の山門の写真を図1下に示したが、この山門を入ると向かって右側に本堂があり、左側に1基の胸像があった。この胸像の周辺写真を次ページの図3上左に示す。本像の右には、「大震火災遭難者追悼之碑」と「戦災殉職諸精霊供養之碑」があった。

図3上右に、本像台座正面の題字を示す。それには、「勝海舟翁之像」とあった。図3下左に勝海舟像を、図3した右に本像背面の制作者サインを示す。サインには「田中 昭和四十九年三月」とあった。



図3. 上左：勝海舟像の周辺、上右：本像台座正面の題字、下左：勝海舟像、下右：本像背面の制作者サイン。

制作者の「田中」とは、一体誰であろうか？「田中」という姓の彫刻家かも知れない。しかし、私は「平櫛田中だ！」と思った。帰宅後に、平櫛田中の彫刻にあるサインを調べてみると、やはり「田中」と書かれていた（[8）のサイト/](#)）。次ページの図4上に、[8）のサイト/](#)にあった平櫛田中のサインを示す。



図4.

上：平櫛田中のサイン、本図は、[8\) のサイト/](#)より借用。

下：本像台座正面の銘文。



図4下には、本像台座正面の銘文を示す。それには、以下のように書かれていた。

勝海舟翁之像：勝海舟九才の時大怪我の際妙見大士の御利生により九死に一生を得その後開運出世を祈って大願成就した由縁の妙見堂の開創二百年を迎へ海舟翁の偉徳を永く後世に傳へるため地元有志に仍つてこの胸像が建られた 昭和49年（1974）5月12日

上記の銘文で「大怪我」とは、具体的に何であろうか？その顛末は、[9\) のサイト](#)に詳しく記載されている。要点は、次の通りである。

勝海舟が犬の襲撃を受けたのは9歳のときです。学問の稽古に通っている途上で野犬に襲われます。後に剣の腕前では、直心影流の免許皆伝になる勝海舟ですが、このときは無力な9歳児です。犬は通りかかった人が追い払います。そして、勝海舟は職人の八五郎はちごろうの家に運び込まれました。これを聞いた江戸最強の喧嘩師・父親の勝小吉は家を飛び出し、八五郎の家に向かったのです。勝海舟は、積み上げた布団によりかかっていた。父親の小吉が、息子が犬に噛まれた股間を確認します。と、そこは、凄まじいことになっていたのです。9歳の勝海舟の股間は皮膚が破れ睾丸が飛び出していました。江戸時代の衛生状態や医療レベルを考えれば生き死に関わる重症でした。小吉は息子の勝を家に連

れて帰り、地主が紹介した外科医を呼びつけ、手術をさせます。手術は終わりますが、医者は命の保証はできないと言います。彼は勝海舟の回復を願い、その日から水垢離をはじめます。冷水を身体に浴び、神仏に息子・勝海舟の回復を願ったのです。勝海舟は70日間寝込みました。その間、生死の境をさ迷う勝海舟を、ずっと抱きしめ添い寝したのが、父親の勝小吉だったと、小吉本人は書き残しています。江戸時代は野犬が多く、衛生状態、医療水準も低く犬に噛まれて死ぬということは、普通にありえたことでした。

以上の資料などにより、勝像の概要は次の通りである

#### 勝海舟翁胸像

設置場所：東京都墨田区本所 4-6-14 妙見山別院

制作者：平櫛田中

設置時期：1974年3月

寄贈者：地元有志

設置経緯：妙見山別院は「親子鷹」でおなじみの勝小吉（1802-1850）と勝海舟（幼名は麟太郎、1823-1899）親子の熱烈な信仰を得ていたことで有名です。1831年、麟太郎9歳の時に犬に急所を咬まれ生死の間を彷徨ってしまいます。この時小吉はここで快復を祈って水垢離をしたと伝わります。その甲斐あってか70日生死の間を彷徨った麟太郎は無事生還。

銅像の銘文の内容は、本稿6ページに記載。

妙見山別院の略縁起は、本稿2ページに記載。

#### （4）日大一中高の加納金助像

私は妙見山別院で勝海舟像を探索後、大江戸線の両国駅（図1上の③）に行って日大一中高の加納金助像を探索した。両国駅のA1出口から道路に出ると、目の前に日大一中高の校舎があり、その玄関前に1基の胸像があった。その周辺写真を次ページの図5上に示す。

本図が示すように、本像は柵の中に設置されていた。従って、本像に近づくことが出来ず、本像の背面などを観察することが出来なかった。本像の台座正面には題字があって、それには「加納金助先生像」とあった。加納像の近接写真を、図5下左に示す。

それ以外には、何の説明も無かった。「それでは、本像の制作者や建立時期が分からないなあ」と思っていると、本像側面に文字が彫られていることに気付いた。その写真を図5下右に示す。それには「一九五二 舜正」とあった。

帰宅して、「舜正 彫刻家」で検索すると、制作者は「藤野舜正」であることが分かった。[10\)のサイト/1](#)によれば、藤野氏の略歴は次の通りである。

藤野舜正（1903年9月27日-1974年12月30日）は、日本の彫刻家。本名は藤野隆秋。群馬県館林町裏宿（現館林市城町付近）出身。はじめ後藤良に木彫を習い、のち北村西望に師事し、1928年3月東京美術学校彫刻科選科塑造部を卒業した。1968年大病を患い声帯摘出手術をして快気したのを契機に、雅号を天光と改めるまでは舜正と称していた。千葉県市川市の地域文化発展に貢献。日展審査員を6回、さらに理事をつとめた。戦後は文化運動者としても活動した。また師北村西望作の長崎平和祈念像の制作筆頭助手をつとめた。晩年は千葉県立美術館の建設促進に献身した。



図5. 上：日大一中高の加納金助像周辺、下左：加納金助像、下右：本像側面のサイン。

加納金助氏の経歴は、ウィキペディアや [11\) のサイト/](#)に記載されている。以上の資料などにより、加納像の概要は次の通りである



## 加納金助先生胸像

設置場所：東京都墨田区横網 1-5-2 日本大学第一中学校・高等学校

制作者：藤野舜正（1903-1974）

設置時期：1952年

設置経緯：加納金助氏（1883年9月4日 - 1953年12月5日）は、日本の政治家、教育者、日本大学常任理事、日本大学副会頭、日本大学第一学園初代理事長。千葉市長（第5、9、10代）、参議院議員（1期）。1883年千葉県下埴生郡小菅村（現成田市小菅）で代々農業を営む藤崎家の三男として誕生。1898年4月成田中学校に入学 1903年卒業。1903年國學院大學高等師範部に入学、同年9月転じて日本大学高等師範部（現在の文理学部）に入学 1906年卒業。1906年、日本大学専門部法律科入学。在学中の1908年11月30日、加納家の長女由香と結婚し姓も加納と改められる。1909年日本大学法学部入学、1910年9月千葉県立千葉中学校の教壇に立つ。1912年11月法学部に在学のまま日本大学に転職され、時の大学常任理事石渡敏一の片腕として附属中学校の設立に関わる。1913年2月14日、日本大学中学校設立認可となり幹事教諭として草創期の学校経営に参画。1915年3月法学部卒業。1924年9月日本大学理工学部の先駆である日本大学商工学校（現在の日本大学第一中学校・高等学校）を併設し初代校長となる。

## 参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト：<https://ameblo.jp/benben7887/entry-11943324872.html>
- 4) のサイト：<https://www.myoken.org/history/>
- 5) のサイト：<https://www.asahi-net.or.jp/~jt7t-enmt/kami/kami.html>
- 6) のサイト：<https://wheatbaku.exblog.jp/25011068/>
- 7) のサイト：<https://warusyawa.hateblo.jp/entry/20061206/1165407463>
- 8) のサイト：<https://aucview.com/yahoo/1102341282/>
- 9) のサイト：[勝海舟は犬が苦手？犬のせいで命を失いそうになった勝海舟？ - はじめての三国志 \(hajimete-sangokushi.com\)](http://hajimete-sangokushi.com)
- 10) のサイト：<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9294.html>
- 11) のサイト：<https://www.nihon-u.ac.jp/history/forerunner/kano/>